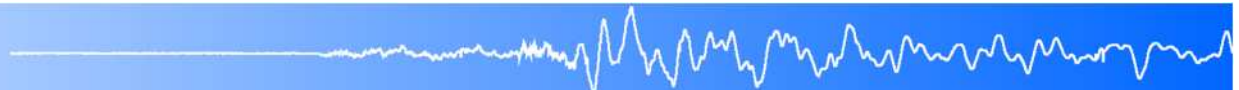


緊急地震速報等に関する アンケート調査結果について

- 資料4-1 熊本地震における緊急地震速報の利活用実態調査
- 資料4-2 熊本地震における長周期地震動の実態調査
- 資料4-3 長周期地震動に関する認知度調査



(空 白)

緊急地震速報等に関するアンケート調査の概要

1. 熊本地震における緊急地震速報の利活用実態調査

1) 調査対象

熊本地震の14日夜9時半ころの地震と16日夜中1時半ころの地震発生時、いずれかの地震で震度5弱以上を観測した市町村にいた20歳以上の男女

2) 調査方法

インターネット上のWEB画面に用意した質問に回答する方式(WEB調査)

3) 有効回収数

1,909サンプル

2. 熊本地震における長周期地震動の実態調査

1) 調査対象

熊本地震時に長周期地震動階級1以上を観測した地域(千葉県、愛知県、大阪府、和歌山県、兵庫県、徳島県、高知県と中国、九州の各県)の10階以上に在住の20歳以上の男女

2) 調査方法

インターネット上のWEB画面に用意した質問に回答する方式(WEB調査)

3) 有効回収数

1,000サンプル

3. 長周期地震動に関する認知度調査

1) 調査対象

東京23区、大阪市、名古屋市に居住する20才以上の男女

2) 調査方法

インターネット上のWEB画面に用意した質問に回答する方式(WEB調査)

3) 有効回収数

1,500サンプル

緊急地震速報等に関するアンケート調査結果について

1. 熊本地震における緊急地震速報の利活用実態調査

緊急地震速報について、4月14日と4月16日のそれぞれの地震時における受信状況、活用状況、評価等を把握するためのWEB調査を実施。

- 緊急地震速報だということが「音や映像ですぐにわかった」と回答した人は、14日の地震では5割台半ば、16日の地震では6割弱となっており、経験による学習効果の可能性が見られるとともに3年前の淡路島の地震時(36.6%)と比べて向上している。
- 熊本地震のときに、緊急地震速報の効果があったかどうか聞いたところ、地震時に震度6弱以上の市町村にいた人においても、「効果はなかった」と回答した人は3割台半ばとなっており、6割以上の人は何らかの効果について回答している。
- いずれの地震の場合も眠っていた人のうち、緊急地震速報がきっかけで目を覚ました人が4割強いる。
- 事前に緊急地震速報を入手した際の対応を考えていた人とそうでない人で、地震時の対応行動について差がみられる。
- 猶予時間が長いほど「効果があった」とする人が多く、特に「心構え」の面で差が見られる。

緊急地震速報等に関するアンケート調査結果について

2. 熊本地震における長周期地震動の実態調査

長周期地震動について、4月14日と4月16日のいずれか最大の揺れを経験した地震時の揺れの状況や認知度等を把握するためのWEB調査を実施。

- 揺れていると感じた時間に関して、「30秒～1分程度」と回答した人が3割台半ばで最も高く、次いで「30秒未満」が2割台半ば、「1～3分程度」が約2割となっている。
- 長周期地震動の認知に関して、「見聞きしたことがあった」と回答した人は5割台半ばとなっている。
- 長周期地震動の特徴について、「なんとなく聞いたことがある」を含めると「高層ビルや長い橋などが大きく揺れる」など、多くの項目は良く知られているが、「関東平野などの大きな平野部では長周期の揺れが大きくなる」及び「低層の建物では揺れを感じなくても、高層ビルではエレベーターのワイヤーが絡まったり傷ついたりすることがある」ということはあまり知られていない。
- 長周期地震動について関心があるかと聞いたところ、「関心がある」と回答した人の割合は4割強(41.4%)、「やや関心がある」と回答した人は5割弱(48.9%)となっており、関心があると回答した人の割合(関心度)は約9割となっている。
- 気象庁が観測した長周期地震動階級の地域毎に体験した長周期地震動階級を比較してみたところ、概ね±1階級の間には収まっている。

緊急地震速報等に関するアンケート調査結果について

3 . 長周期地震動に関する認知度調査

長周期地震動について、三大都市圏(東京23区、名古屋市、大阪市)における認知度を把握するためのWEB調査を実施。

- 長周期地震動という言葉の認知について、「見たり聞いたりしたことがあった」と回答した人の割合は5割弱(49.4%)となっており、H26年度、27年度調査と比較すると、わずかに下降傾向となっている。
- 長周期地震動を見聞きしたことがある人に対して、長周期地震動階級の認知について聞いたところ、「言葉も内容も知っていた」と回答した人の割合は2割弱(17.5%)、「言葉は知っていたが、内容は詳しくは知らなかった」と回答した人の割合は4割台半ば(43.9%)となっており、言葉を知っていると回答した人の割合(認知度)は6割強(61.4%)となっており、H27年度調査と比べて上昇傾向となっている。
- 長周期地震動の予測情報の利用について、「利用しようと思う」と回答した人の割合は6割弱(58.3%)、一方「よく分からない」と回答した人の割合は3割弱(28.5%)となっている。
- 長周期地震動の予測情報に含まれればよいと思うものについて、「知りたい場所での長周期地震動による大きな揺れがあるのかないのかの予想」が5割弱(49.5%)で最も高く、次いで「予想される揺れの状況(人への影響)」が4割台半ば(46.0%)となっている。